

書評・紹介

岡田久美子著

『岡田久美子写真集 フィールドノート 余映』

自費出版（光村印刷発行、Bee Books）、1999年、
B5判変型、総46頁

前著『フィールドノート 余滴』をいただいて、岡田さんらしい内容に「ああ、やはり——」と頷くところがあったのだが、つづいての今回の「——余映」、前著に重ねての彼女らしさが遺憾なく発揮され、一見軽そうな書ながら圧倒される。一に写真。写真集なのだからそれが良いのは当然だとはいうものの、頁を繰ると“地理”写真としての好作品が次々と現れる。夫妻での、あるいは友人との精力的ともいえる回を重ねた旅の成果としての旅写真の数かずの中から精選された40数葉、漏れたものにも良いものがあることと思われる。

二には解説文。100字余の短文ながらその地を語り、情景を述べ、書かれざることをも推測させる余韻を残す。元来、彼女の文章は時にウィットに富み、頬をゆるめさせるものがあるのだが、この書のなかでは例えば「少女戯傘」「クレオパトラの道」など。

三に“一字題”。これは、彼女の平素からの“漢字”に対する関心と素養を示すもので、余人には至難の技。平易そうに見えもするが、前著でも示されたこの素養が今回も更に難度を上げ、なるほどと感心させられる。例えば「屹」「虔」「省」など。

更にこの素養を一見さりげなくではあるが、決定的にみごとに披瀝しているのが、序に示された“漢詩”。約束ごとのやかましい作詩法をクリアするだけでなく、「野帳余映」の4字を頭に詠み込むという離れ業をやったのける才能。まさに脱帽！

学業を畢えてから、我々の年代ははや数十年。在学中に学んだことももちろん骨肉にはなっていないが、個々の技をどのようにグレードアップす

るかは各人の関心の有りようや精進によることを示す好例といえようか。

ただ一つ、強いて難点をあげるならば、文初が詰まっているものと、1字落としになっているものが統一されていないのが眼につく。出版社から助言があつて然るべき。しかし、四項に絞って挙げた美点によってこれは蚊の足跡のようなもの。

[石田 裕子]

エドワード・レルフ著

『都市景観の20世紀——モダンとポスト モダンのトータルウォッチング』

（高野岳彦・神谷浩夫・岩瀬寛之訳）筑摩書房、
1999年、A5判、3,200円、総308頁

タイトルからどんなにビジュアルな中身かと期待に胸を膨らませて本書を開くと、その期待はおおいに裏切られる。建築の分野で出版されている『〇〇ウォッチング』は建物の様式、美しさ、ディテールを余すことなくアピールする、豊富な写真で構成されている。しかし、この本ではレルフが撮った写真についてはお世辞にも上手とはいえないし、被写体に対して淡泊な姿が伺える。だが、レルフがこの地味な本で主張したかったのは「全体的な見方」なのだ。カメラのファインダーを覗くレルフの目は、目立つ建物を追うのではなく、ファインダーという枠で切り取ったものを様々な視点を設定して見ようとする。彼は自分の立場をスペシャリストではなく、ゼネラリストであり、このゼネラリストの見方はかっこわるいアプローチであるが、顕微鏡や計量経済モデルと同程度のその有効性を発揮すると明言する。「一つの視点だけから景観や都市を理解しようとするのは、人間の足の形や食事文化の詳細な研究から人間の全体像を記述しようとするのに似ている」と彼は語る。彼が被写体に一定の距離を置こうとするのは、全体を意識していることほかに、都市や建造物の作り手ではなく、あくまでも実感的な景観のユーザーの立場で見ようとする姿勢の現れでもある。

レルフはカメラをぶら下げ、スケッチブックを小脇に抱えてひたすら歩き、時には車窓から「ウォッチング」する。「景観に関する最も優れた情報源は景観そのもの」であり、だからこそ彼は細かく「ウォッチング」していく。景観は、「目に見えない時代精神のイメージを偶然に映し出している鏡」ではなく、「世界のしくみや世界を改良する方法について確固たる思想と信念に基づいて形成される」ものである。「きわめて人間的なものであり、人間の意思を表現しており、深層の奥深くには意味がこめられている」のだ。この景観に対する考え方は前著『場所の現象学』において展開された「景観は、文化的な態度と活動とを表現したそれを規定するものである」という論を踏襲するものだ。本書では、訳者あとがきにもあるように、①建築物②技術革新③都市計画④社会変化（電気通信システムに媒介された社会出現）の四つの特徴を視点として景観に迫る。そしてレルフが被写体とする都市（都市景観）は本書のサブタイトルにもあるようにモダニズムの時代からポストモダニズムの時代のそれである。都市という舞台上で展開される二つの様式や思想の重なり、あるいはいずれにスポットがあたる。レルフは前著で「景観はその自然のおよび人工的な特徴と、それを経験する者にとっての意味との、特定の結合状態から生じる特質を常にもっている」と述べているが、この結合状態を招き寄せる方法が「ウォッチング」に他ならない。「ウォッチング」は景観の表層をなめる作業ではなく、景観がつけられた社会背景やその背後にある精神を探っていくとする、景観に向き合うという経験を軸に、経済的・社会的そして政治的諸関係の幾重にも重なる層を縦断し、横断する作業なのだ。

さて、読後にどうしても引っかかる点についてふれておきたい。一つは、景観と向き合う際の観察者の立場の問題である。たとえば第12章結論の部分で、景観の不連続を画す線は建築様式の違いだけではなく、社会的・文化的な境界の印でもあることを述べている。実際の景観から読みとれる社会断絶として、大学キャンパスと全米一貧困な公営住宅との位置関係が写真を含めて記述されている。レルフは二つの敷地は街路をはさんで世界が分離されており、「一本の道路を渡ることは、富裕から貧困へ、希望から絶望へ、環境の管理法を教育する場所からそれが実践されている場所

へ」と社会的隔たりを渡ることには他ならないとしている。しかし、これはあくまで大学キャンパスサイドのレルフの経験あるいは見方にすぎないのではないか。直接的な経験や自己の記述の重要性を説く時、レルフがハイ・ソサイサティーに属す、健常で家族を有する白人男性であるという立場表明は不必要なのであろうか。今一つは前述したことにも関わる。貧困が開発事業や建物に隠蔽され、快適なイメージによって社会的・経済的不平等が視界から消されたとしているが、見えない存在として位置づけられている人々にとっても、景観は同様に捉えられるのかという問題である。この件についてぜひともレルフの説を読んでみたいところである。

本書の読み方としては、訳者あとがきからスタートすることをお勧めしたい。全体の構成、読む際のポイント、そして各章の内容がコンパクトにわかりやすくまとめてあり、レルフを熟知した訳者の尽力の賜物といえる。最後に都市計画者という立場からレルフと同時代の都市を題材とした、J. バネットの『都市デザイン【野望と誤算】』を並行して読むと、レルフのオリジナリティがより鮮明になることを付け加えておきたい。

文献：

エドワード・レルフ『場所の現象学』高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳、筑摩書房、1991年

ジョナサン・バネット『都市デザイン【野望と誤算】』兼田敏之訳、鹿島出版会、2000年

[西 律子]

SAWADA, Kayoko (trans.)

ONE LUMP OR TWO AND OTHER JAPANESE TALES

（関敬吾編『日本のむかしばなし』岩波文庫、より8話を英訳したもの。自費出版。B5版、頒布価格1,000円。1994年、1,000部印刷。1998年、500部増刷）

SAWADA, Kayoko (trans.)

TOKIYORI

（高山樗牛著『滝口入道』岩波文庫、を英訳したもの。自費出版。A5版、頒布価格600円。1999年10月発行以来、計400部印刷）